

出典：櫻井進『江戸の無意識』／オリジナル問題

文章略解

分裂と孤独に悩む近代的自意識は、自らの措定^{そてい}する観念的共同体への帰属意識によって自己のアイデンティティを回復し、病んだ無意識を解放しようとする。しかしその観念的共同体の基盤である「人間」観念は実定的根拠をもたない虚構である点において恣意性を免れず、必然的に自己回復の運動は「人間」＝自己の特権化と非「人間」（＝他者）の排除につながってゆく。ともに十九世紀に成立した『フランケンシュタイン』『八犬伝』は、以上のような、自意識の治癒の空間が排除を論理とする権力空間に変容してゆく事情をうかがわせる作品である。

解答

- (一) 近代社会の中で自己存在の意味を見失った人間が、疎外される以前の状態を理想とした主観的世界に自己を解放しようとする運動。
- (二) 実定的根拠のない人間観念を基盤とした社会を、先験的な存在として他者に示し、それへの同意を求めるということ。
- (三) 自身を人間と規定することは、他者に先んじて自らを人間であると宣言する行為以外にいかなる根拠ももたないから。
- (四) 恣意的に措定された規範的概念によって成員を教育し、それに準じた思考や行動様式を強制する社会。

(五) 近代社会の中で喪失した自己を回復しようとする運動は、自己の存在証明を自らの観念的共同体への帰属意識に求めようとするが、その共同体が主観的価値基準を基盤とする以上、必然的に他者との境界の設定を通じた自己の特権化と他者の排除をもたらすから。

[118字]

(六) a || 繊細 b || 変貌 c || 広範 (広汎) d || 隷属

出典：司馬遷『史記』「張儀列伝」の一部 / オリジナル問題

書き下し文

張儀は魏の人なり。諸侯に遊説す。嘗て楚の相に従ひて飲す。已にして楚の相、璧を亡ふ。門下、張儀を意しむ。曰く「儀、貧にして行無し。必ず此れ相君の璧を盗みしならん」と。共に張儀を執へて、掠奪すること数百なるも服せず。之を釈せり。其の妻曰く、「噫、子、読書遊説する母くんば、安くんぞ此の辱めを得んや」と。張儀、其の妻に謂ひて曰く、「吾が舌を視よ。尚ほ在りや不や」と。其の妻、笑ひて曰く「舌在るなり」と。儀曰く、「足る」と。

現代語訳

張儀は(戦国時代の)魏(の国)の人である。諸国の領主たちのもとを訪ねる旅をしては政策の助言をしていた。以前(のあるとき)、楚(の国)の大臣につきしたがって(酒を)飲んだ。しばらくすると楚の大臣は璧(という宝玉)を紛失した(ことに気付いた)。(大臣の)側近たちは張儀を疑った。(側近たちが)言うには、「張儀は貧しいし品行も悪い。きつとこいつが大臣さまの宝玉を盗んだのだろう」と。(彼らは)一緒に張儀を捕まえて、数百回も笞で懲らしめたが、(張儀は無実を主張して)屈服しなかった。(側近たちは諦めて)張儀を釈放した。(張儀が帰宅すると)彼の妻が言うには、「なんてまあ(ひどいことでしょう)。(それにしても)あたなが本を読んで(学問を積んで、諸国を)遊説することがなかったならば、どうしてそんな屈辱を受けることがありますようか(、いえ、なかったはずです。もう遊説なんかやめてください)」と。(ところが)張儀は、自分の妻に語りかけて言うには、「私の舌を見る。まだあるか、どうだ」と。(それを聞いて)彼の妻が笑って言うには、「舌ならありますよ」と。(そこで)張儀が言うには、「(それで)十分だ」と。

解答

(一) 張儀は貧しいし、普段の行状もよくない

(二) どうであれあなたが答打たれて肉体を傷つけられるような屈辱を受けることはなかったはずだ

(三) 夫は肉体を傷つけられたのに、痛むはずもなく現に喋っている本人の舌の安否を尋ねたのが馬鹿馬鹿しかったから。

(四) 舌さえあれば話すことができるから、節を曲げずに遊説を再開して生きてゆくには十分だということ。

解説

問題文の主人公「張儀」は、中国・戦国時代の政治家で、同門の蘇秦とともに「縦横家」に数えられる。秦の恵王のために諸国を遊説して「連衡策」を説き、蘇秦の説いた「合従策」を崩した。というのは大学受験生には常識だろう。

さて、入試問題を解くにあたっては、設問番号の順に設問を解き進めるのが得策とは限らない。とくに漢文では、文字になっている情報は口で喋るときの数分の一しかないと言われるから、文章全体を見渡して前後関係をよく確かめ、設問を解くための情報が比較的豊富なものや、答案作成作業が比較的単純なもの、すなわち手堅く得点しやすい設問を先に片づけ、可能ならばその結果を他の設問を解くのに利用することを考えるべきだ。

本問では、(一)は他の設問との間にさほど強い相関がないようだが、(二)～(四)は張儀夫婦の会話部分に連続して設定されていて、答案作成作業も連動する。この夫婦については夫・張儀のほうが読解の背景となる知識があり、発言内容を解釈するための情報が多いということになる。よって、右三問については、まず(四)を先に片づけるのがよい。そして、そこで明らかになったことを利用しながら、張儀の妻の言動に関する他の設問を解くわけだが、(二)では傍線部中の指示語の指示対象を明示する必要があつて答案作成に複数の要素が絡むのに対して、(三)は答案作成作業が(二)よりも単純そうだ。したがって、実際の答案作成の手順としては、(一)→(四)→(三)→(二)の順に解き進めることが望ましいということになる。この解説もその順番で進めよう。

(一) まずは、漢文の設問文に言うところの「平易な現代語」という表現には入試独特の約束事があることを思い出しておこう。これは決して「子どもでもわかるような……」という意味ではない。問題文が漢文すなわち古典中国語であることに鑑みて、「答案はすべて日本語で書け」、言い換えれば「固有名詞以外は、文中の表現(＝古典中国語)を用いてはならない」との意味に解釈すべきだ。

さらに言えば、もともとこれは入試問題の一環なのだから、ここでいう「日本語」とは「現代日本語の書きことば」である。答案には必要に応じて熟語を積極的に用いるべきだ。傍線部中に一字で表現されている語を熟語で表現するには、その字を含む熟語を用いるのが基本的な手法だが、その際に、文中の字と意味上の共通点のある字で構成された熟語（《連文》と呼ばれるタイプの熟語）があればそれが相応しいことが多い。ただし、その字を含む熟語の現代日本語としての用法が文中の語とニュアンスが異なることも多い。そのような場合には、もっとも意味の近い熟語のうち文中にないほうの字を含む熟語を探すことも許容範囲だろう。（文中の字が「A」なら「AX」や「XA」という形の熟語を用いたが、ニュアンスが異なる場合はその「X」を使って「XB」や「BX」という熟語にまで視野を拡げてニュアンスの一致する語を探すことも考える、ということだ。）

さて、傍線部の「儀」はもちろん「張儀」のことと、これは固有名詞だからそのままでもよいと考えた諸君もいるかと思うが、「儀」という言葉は現代日本語でも「儀式・儀礼・典礼」などの意味に用いられることがある。フルネームで書いて失点を防ごう。

「無行」については、まずは「貧」の延長にあり、かつ傍線部に続いて張儀を盗人と決めつける表現があることから、傍線部は張儀に対する嫌疑の根拠となっていることが読み取れる。すると「行」は「平素の行い」を意味する「行状・行跡・所行・素行・品行・操行」などの言葉で表現できることがわかるだろう。そしてこれを否定するのが「無」だが、右の語群のうち後半に挙げた「素行・品行・操行」などには「善・良」といったニュアンスが含まれることに注目すると、「無行」で「行状の悪さ」を意味することがわかる。ここに気付かず「行動がない」などとやっつけてしまうと、日本語として意味の通じない文になってしまうことに注意しよう。

（四）（先に述べたとおり、「張儀」に関する設問から片付けてゆこう。）直前に「舌」という漢字があるからといって、傍線部の「足」を「foot」の意味にとる人はいないだろうが、では「足」とは何か。そもそも張儀は縦横家として各国を遊説して回った弁舌の士である。政治に携わる知識人の責務には節操を貫くことも含まれる、という常識を援用して考えると、「舌はまだあるか」「あるわよ」「それなら『足』』という流れから、「舌さえあれば弁舌で節操を貫くことができる」と言いたいのだとわかる。「足」は「満足・充足・不足」などに含まれる「足」と見て「enough」の意味にとればよいだろう。そしてそれが何をするのに「十分」かということを明示する必要はあるが、その際に「遊説の再開」に絡めてぜひとも「節義の貫徹」に触れておきたい。（ここで、傍線部末の「矣」という字に注目してもらいたい。訓読の際には決まって無視される文末終尾辞で、俗に「置き字」などと軽んじられることもあるが、漢文に無駄な漢字はなく、この字にも明確な役割がある。文末の「矣」は、《断定・決定・決意》などを強調する助辞で、自分の考え

を格好良く言い放っている語感がある。これを知っていると、発言のニュアンスを汲むのに役立つ。

しかしそれでは解答欄の大きさに対して答案の字数が足りない。内容を薄めて字数を稼ぐのは入試では不利だから、二次的な要素を使って内容を補強することを考えよう。それには、文中に要素を探しつつ、《前提条件》もしくは《対比項目》を組み込むのが常だ。ここでは、「舌があれば喋れる」ということを「遊説再開」の《前提条件》として答案の前半に書けばよい。なお、《対比項目》としては「たとえ身体が痛めつけられていても」などが考えられるが、《前提条件》を組み込めば2行（＝50字前後）には十分だ。

(三) 妻の行為としては「笑」一字しか見えない。そしてこの「笑」は和語の「わらう・えむ」に対応する漢字語群の中でもっとも意味が広いところが厄介だ。そこで、この「笑」が何によって引き起こされたかということを読み取ろう。ここでありがちな勘違いは、「重傷を負って帰ってきた夫を迎えた妻が夫の身体を心配していたが、夫が喋れることがわかって安心した」というもの。しかしこれは誤読だ。

直前で夫・張儀は「視吾舌。尚在不」と妻に尋ねている。ということは喋っているわけだ。舌がなければ喋れるはずもないのだから、わかりきったことをわざわざ口に行っていることになる。妻はただ夫の声を聞いただけではなく、夫の質問にまともに答えてから笑っているのだから、夫の言う言葉の意味も理解しているはずだ。心配していたのなら、「そんなわかりきったことをわざわざ私に尋ねるなんて、あまりの苦痛に耐えかねて夫は発狂してしまったのではないか」などと心配が余計に募り、泣き出したりするはずだろう。ところが妻は笑っている。ということは、夫に対して「何言ってるの、馬鹿馬鹿しい」と嘲笑しているのだと解釈するほうが妥当だろう。

このことは、笑う妻に対して夫・張儀が「足矣」と「矣」まで付けて言い放っていることから裏打ちできる。妻の「笑」が「安堵」のような夫との共感に繋がることだったら、夫もにつこり笑って話は終わるだろう。夫から見れば、「わかったらんのか」と思っただからこそ「舌があればそれでいいのだ」と念を押すことになったのだと考えられる。

さて、答案末尾に夫に対する軽侮の念を表現することを確認したら、その内容について詰めてゆく。「喋っているのだから舌は健在なのにその安否を尋ねている」ことを書くことになるが、「尋ねる」の部分を「聞く」と表現してしまうと、「安否を聞いた」では「第三者によって夫に関する情報もたらされた」という意味にも取れるから、誤読の扱いを受けて減点されるだろう。「問うた・訊ねた」など、「質問」の意味が確かな言葉で表さなければならぬ。答案に多義的な表現は禁物である。

さらに、前問の最後に考えたのと同様に、ここでも解答欄の大きさを有効利用しよう。この設問がもともと《前提条件》を問うものなのだから、さらに前提を遡るよりも、「痛めつけられた身体」と「元氣な舌」との《対比》を打ち出すことで答案を補強するのよい。

(二) これも現代語訳の問題だから基本的な注意事項は(一)に同じ。さらに本問では、傍線部が《疑問副詞》として働く「安」を含んでいるので、《疑問》と《反語》との識別が必要である。ここでは、傍線部に先だって《否定》の「毋」があり、これが「なクンバ」と《仮定条件》で読まれていることがヒントになっている。漢文では《否定文(否定節)の連続》した表現は《前半(先行否定文) 〓条件》+《後半(後続否定文) 〓帰結》を示す。よって傍線部も実質的には否定文の働きをしていることになり、《反語》だと判断してよさそうだ。(前後するが、このことは「安」が本来の「安定」の意味ではなく《反訓》によって《疑問副詞》として用いられていると判断することにも役立つ。) さらに、《疑問副詞》としての「安」が《疑問》を示すときは《前提(なぜ)》または《場所(どこ)》を問うはずだが、傍線部に続く夫・張儀の発言はそのどちらにも答えていないことから、傍線部が《反語》になっていることがわかる。

古文・漢文を通じて、反語文の現代語訳が求められたら、字数制限からして「どうして……だろうか、いや……ではない」などと直訳するゆとりはない、と考えるべきだ。むしろ「決して……ではない」などと端的な否定文の形をとることによって、浮いた字数で内容を充実させることが期待されている。この設問でも、指示語「此」の内容を十分に説明してみせることを優先しよう。

さてその「此」だが、被修飾語に「辱」が見える。この字には「かたじけない」という意味もあるが、文中では名詞だから「はづかしめ」の意味であり、張儀が盗みの廉むらで疑われて咎で打たれたことに対応する。「屈辱・恥辱・侮辱」などの語で表現すればよいだろう(「榮辱」や「雪辱」では熟語全体としての意味が異なってしまう)。

その内容を具体化するにあたって、十分に注意すべきことがある。張儀の受けた仕打ちを「処刑・刑罰」などの語で表現してはならない、ということだ。張儀は疑われたのであって証拠は拳がっていないから、この咎打ちは「自白の強要」を目的とする「拷問」であって、「刑罰」とは言えない。

もうひとつ。妻は夫・張儀の受けた屈辱の内容をどう認識していただろうか。ここで、(四)から遡って考えてきたことが意味を持つ。張儀は政治すなわち「経国の大業」に高い志をもっているのだが、妻のほうはそれが理解できていないようだ。当時の中国には「男

尊女卑」・「夫唱婦隨」などの言葉が当てはまるような文化背景があったにもかかわらず、この妻は「母読書遊説」などとほざき、また(三)で見たように、苦痛に耐えたばかりか志を貫くことができれば恥辱を恥辱ともしない夫を小馬鹿にするような態度さえ取っている。そこで、夫・張儀の「大局的視野」と妻の「近視眼的視野」とのコントラストを明示することが、答案作成の要点になる。「志は無傷だ」と考える夫との対照をとって、妻が「身体が痛めつけられている」ということを屈辱と考えていることを読み取ろう。張儀の無実に取り立て「冤罪」などの夫の立場に立つ語を盛り込むことは、この設問に関しては逆効果なのだ。(なお、親を大切にすることを中国の文化では、肉体は親から最初に与えられたものであり、それを他人に傷つけられるのは不孝にも通じて大きな恥辱と考える。それが常識である以上、そのくらいのことにはこの妻にもわかっていたはずだ。)

最後に、答案の否定部分の表現に注意すること。傍線部を含む否定文の連続が《条件＋帰結》の意味に解釈すべきものだということはすでに確認したが、張儀は実際には咎打たれて帰ってきているのだから、この部分の《条件＋帰結》は日本語では《反実仮想》に相当することになる。「ないはずだ」ではなく「なかったはずだ」の形で訳すことまで気を抜かずに書こう。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--